

西箕輪公民館内

ふるさと通信編集局

電話 0265-72-2319

FAX 0265-74-1263

西箕輪 ふるさと通信

ふるさと通信 第138号

令和5年（2023年）

6月 1日 発行



85人のランナーが 新緑の高原を走りぬけました ～ 第34回西箕輪高原マラソン大会が行われました ～

4月29日（土・昭和の日）に、第34回西箕輪高原マラソン大会を開催することができました！

今年は、コロナ禍で幻となっていた第31回・32回・33回の大会を踏まえ、大会開催の可否基準日を設けたり、開会式、閉会式、6kmコースを止めたり、また、検温やスタートとスタートの時間を充分空けるなど、新型コロナウイルス感染拡大への配慮をしながら、しかし、以前までのコースと同様のコースで、たくさんの参加者の出場をいただき、開催することができました。

西箕輪小・中学校の児童・生徒の皆さんを主として、地域の皆さん、学校の先生方、遠く地区外の方たちなども含め、85名の参加者が西箕輪の春の風を受けながら高原を走り抜けました。各部門の優勝者を右に掲載しますが、参加者全員が持てる力を発揮し走走されました。走り終えたさわやかな表情が印象に残ります。

今大会でも、これまで同様、事前打合せを重ね、安協や各分館の役員の皆さん、保健師さん、公民館を利用されている各種団体の皆さんも支援に際していただき、ゴールでの正確な判定やマラソンコースの監察など、より安全で確実な運営ができるようにご協力いただきました。

今大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策をとりながらの大会となったため、スピーディーな運営という面で課題もありましたが、大会を迎える前の西箕輪の各地域で練習に励むランナーの皆さんの活気、当日の力走、校長先生はじめ小学校の先生方のランナーとしての参加、ご家族皆さんと中学校の先生方によるランナーの見送り、そして、ゴールを迎える温かな声援や拍手など、これまで以上に多くの皆さんのご協力と大会開催への思いを感じつつ終えた今大会でした。

コロナ禍に直面した私たちだからこそ、今後も伝統のこの大会が、にぎやかに開催され続けられることをいっそう強く願わざるを得ません。

（公民館）



イナタニ・シース 「INADANI SEES」

—農・林の活性化と他の業界を結ぶ風に！—

—INADANI は伊那谷、SEES は見る・出会う・種の意味—

市営大萱団地跡地に、産学官連携拠点施設「INADANI SEES」が建ち、この4月6日には竣工式が行われました。

この施設は「伊那谷の地域資源を活かした農林業の活性化」「全国から多様な人材が集まる拠点」「農林業に関わるイノベーション（変革・革新）の風をおこす施設」を目指しています。



完成した「INADANI SEES」

- ・日曜日と祝日は閉館
- ・開館時間は9時00分～18時00分
- ・施設内には会議室やキッチン、展示コーナーもあり、「農や森」に関する内容であれば、講座・イベント・会議・情報交換など市民の交流の場としての活用もできるようです。これまでも「薬草のサークル」「有機農家の集まり」などの団体から問い合わせがあったようです。

また今後、「トークイベント」や「焚火を囲む会」など、様々な催しも計画されているようです。5月26日（金）にはオープニングイベント（講演と交流会）が開かれました。

催しや利用については、施設までお問合せ下さい。

恵まれた自然環境・信州大学農学部が隣接・インターに最も近い・工業団地がある・農業が盛んな西箕輪の地に建つ INADANI SEES。

この施設が、地元西箕輪の皆さんに関心を持っていただき、大いに活用され、西箕輪の一つのシンボルになることを願っています。

なお、この施設への出入りで、車の流れがこれまでとは変わることが予想されますので、通行時にはご注意ください。

（区長会）

令和5年度の 西箕輪支所・西箕輪公民館の職員です

【前列左から】

- 地域包括支援センター
支援専門員 矢澤 理恵
- 図書館司書 田中 礼 高橋 楓
- 西箕輪担当保健師 辰ノ口 明子
- 事務職員 池上 加代子

【後列左から】

- 子ども会育成会長 宮下 芳雄
- 公民館主事 大井 船礼
- 公民館長 千賀 義博
- 支所長 山口 俊樹
- 庁務技師 富永 英明

（支所）

新しく、保健師と図書館司書2名が
着任しました。
よろしく願いいたします。



止まる 飛び出さない！ 小学校交通安全教室で

—私たち大人も。 歩行者も運転者も 気をつけましょう！—

4月26日（水）西箕輪小学校で春の交通安全教室があり、全校児童が体育館に集まり、学校長・駐在署長・安協会長・育成会長から、「交通事故にあわないために気をつけること」の話がありましたので、今号の安協の記事はその時に話されたことを載せます。



▷太田学校長「いつも考えている心配なことがあります。それは皆さんが交通事故にあってはいいないか、事故にあわないで!!ということです。そして、いつも車がたくさん走らる中で、よく無事に学校に来てくれたなあって思っています。命はひとつです。5つのことに気をつけてください。①もしかして②止まる③見る④待つ⑤確かめる 特に②③④を守りましょう。」

▷坂田駐在署長「私は小さい頃に家でかくれんぼをしていて車にはねられたことがあります。幸い今もこうして元気です。ゲームはリセットできますが、命は帰ってきません。お家は一番安心できる場所なので、気が緩みがちです。ですので、特に家の周りは事故にあいやすいです。①飛び出さない②家の行き帰りはグリーンベルトの上を歩く。この2つに気をつけましょう。」

▷清水安協会長「10年後には小学生の皆さんは、車の運転をするようになるでしょう。車に乗っていると、道を歩いている皆さんの様子がよく見えます。低学年の弟を兄が守るようにして歩いています。横断歩道では、バラバラと渡るのではなく、止まって待って渡ってくれています。①車と歩行者の互いが気を配り合いましょう。②急な飛び出しはしないようにしまししょう。」

▷宮下育成会長「朝、大萱の五差路の信号のところ立って皆さんを見守っているとき、信号が点滅を始めてもあわてて横断することはなく、止まって待っている皆さんがいます。他の場所でも、止まってくれた車に頭を下げてお礼をしている皆さんを見かけます。このようにして、皆で事故に合わないようにならなうにしっかりとやっていきましょう。」



事故にあわないで！特に「止まる」「見る」「待つ」を守りましょう！
真剣に太田校長先生の話を聞く全校児童

4人の方のお話を児童の皆さんはうなずいたり、答えたりして真剣な顔で聞いていました。4人の方が共通に強調されたことは「止まる」「見る」「飛び出さない」です。子ども達もちろんですが、大人も車もお互いに気をつけ、地域の安全を 皆で守っていきましょう。

（安協）（育成会）

雪形「種まき じいばあ」

“5月1日（月）午前9時40分ごろ、中央アルプス千畳敷カール南側に、毎年雪形の写真を撮り続けている駒ヶ根市の写真愛好家によって「今年もきれいな島田娘に会えた」というメッセージとともに、中央アルプスを代表する雪形「島田娘」が、撮影された”と新聞に報道されていました。



島田娘の雪形

この「雪形」は、各地に残っていて、昔から農作業の目安とされてきています。高遠町や富県地区からは「駒」と呼ばれる雪形が見えるそうです。

さて、西箕輪からは、どんな雪形が見えるのでしょうか？写真は、新聞にこの記事が載った5月2日（火）の西箕輪中条から見た西駒の雪形です。この雪形は「種まき じいばあ」「畑」と呼ばれているとお聞きしました。地元で伝わる大事な農事暦の目安のひとつですね！（公民館）



新緑のなかを歩く

～西箕輪ハイキング（ウォークラリーと自然観察会）が行われました～



恒例の「西箕輪ハイキング」が、5月13日（土）に行われました。はびろ自然遊歩道の展望台を下ったあたりで、思わぬ降雨のため、途中から林道を下るコースに変更となりましたが、子どもさんたちも含めた16名が参加して、羽広地区内の自然や歴史、新緑の里山を楽しみました。

今年は、「みはらしファーム→羽広遊歩道→考古資料館」までは、羽広地区にある史跡や羽広の地から見える景色に注目しながら、それぞれのペースとコースで、クイズを交えたウォークラリー形式で歩き、「考古資料館→仲仙寺→展望台」では、講師の野口さんより説明を受けながら、春に咲くたくさんの植物に触れながら「西箕輪ハイキング」を行いました。

また、見学地の考古資料館では、創造館の講師の浜さんから、展望台ではジオパーク講師の酒井さんから、それぞれ専門家の方のお話をお聞きすることができました。

羽広地区を中心とした春の里山を歩き、歴史や自然や展望の良さを味わいながら、道々で交わされる会話や講師の説明などからも、地元西箕輪をゆったりと見つめる時間となりました。（公民館）



考古資料館が建つ遺跡の名前は？



伊那谷は、どのようにしてできた？

じ ばち あ い こ う か い そ う か い

地蜂愛好会総会が 西箕輪ぬくもり館で開かれました

～蜂追いの魅力に触れて 楽しみながら 地域に貢献！～



4月15日（土）ぬくもり館で「伊那市地蜂愛好会総会」が開催されました。50名を超える地蜂の愛好者である会員は、伊那市や上伊那だけでなく、県外の会員もおおいです。蜂追いに対する関心の高さですね。この会の会長を務める羽広の山口政幸さんは「蜂の持つパワーにあやかり、山の恵みに感謝し、マナーを守って楽しく蜂追いをしたい。蜂追いを地域貢献につなげたい。」とあいさつの中で述べられました。

昨年、令和4年度の事業は、信州大学農学部と連携して行った「講演会「蜂追い文化の継承」」や、会員対象の「蜂追い体験学習」、蜂を追う飼育し増やす「地蜂コンテスト」、NHK・BS「新日本紀行」では、蜂追い活動の全国への発信もできました。今年は、「蜂追い体験会」に会員以外の方も参加できたり、地蜂愛好会のPR活動も行ったりしながら、蜂の知恵やパワー、蜂追いが持つ文化価値、活動を通した自然とのかかわりをさらに広めていく計画です。

会長が地元であったり、西箕輪の会員も多くいたり、コンテストもみはらしファームで開かれたりしますので、会員になったり、イベントに出かけたりして、仲間を作ったり、蜂や蜂を追う魅力に触れたりされてはいかがでしょう。（公民館）



「山の恵みに感謝し楽しく蜂追い！」 あいさつをする山口会長